

長崎県感染症発生動向調査速報（週報）

2025年第28週 2025年7月7日（月）～2025年7月13日（日） 2025年7月17日作成

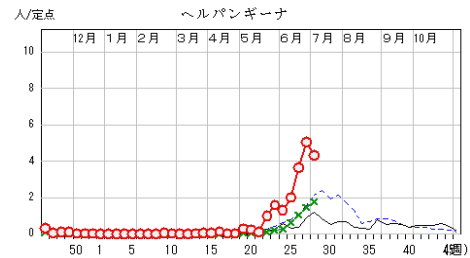
☆定点※報告疾患（定点当たり報告数の上位3疾患）の発生状況

（1）ヘルパンギーナ

第28週の報告数は134人で、前週より23人少なく、定点当たりの報告数は4.32であった。

年齢別では、2歳（36人）、1歳（30人）、3歳（24人）の順に多かった。

定点当たり報告数の多い保健所は、県北保健所（10.00）、対馬保健所（8.50）、佐世保市保健所（6.75）であった。

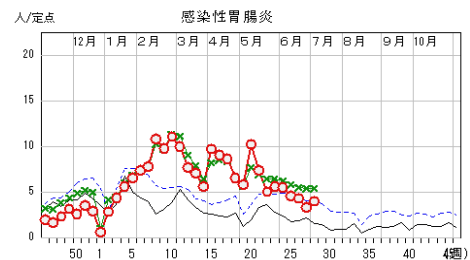


（2）感染性胃腸炎

第28週の報告数は125人で、前週より22人多く、定点当たりの報告数は4.03であった。

年齢別では、1歳および1歳未満（18人）、10～14歳（15人）の順に多かった。

定点当たり報告数の多い保健所は、西彼保健所（10.67）、県央保健所（8.20）、県北保健所（7.00）であった。

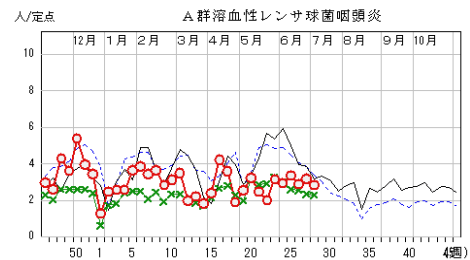


（3）A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第28週の報告数は88人で、前週より11人少なく、定点当たりの報告数は2.84であった。

年齢別では、7歳（14人）、10～14歳（13人）、5歳（12人）の順に多かった。

定点当たり報告数の多い保健所は、県南保健所（19.33）であった。



○ 当年(長崎県) — 前年(長崎県)
× 当年(全国) - - 前年(全国)

※急性呼吸器感染症定点数：51、小児科定点数：31、眼科定点数：8、基幹定点数：12
（2025年第15週より定点数が変更されました）

☆上位3疾患の概要

【ヘルパンギーナ】

第28週の報告数は134人で、前週より23人少なく、定点当たりの報告数は4.32でした。地区別では、県北地区（10.00）、対馬地区（8.50）、佐世保地区（6.75）、長崎地区（5.00）、県央地区（4.00）が警報レベルの報告数となっています。

本疾患は、発熱と口腔粘膜に現れる水疱性発疹を特徴とし、夏期に流行する小児の急性ウイルス咽頭炎です。主な原因はエンテロウイルスで、感染経路は、飛沫感染と患者の便に汚染されたオムツや下着、器物からの接触感染（糞口感染）です。便からは1週間から4週間にわたりウイルスが検出されるため、回復後も感染源となり得ます。保護者は乳幼児に手洗いを励行させて、感染防止に努め、体調管理に気をつけてあげましょう。

【感染性胃腸炎】

第28週の報告数は125人で、前週より22人多く、定点当たり報告数は4.03でした。地区別にみると、西彼地区（10.67）、県央地区（8.20）、県北地区（7.00）は、他の地区より多くなっています。今後も動向に注意し、予防に努めましょう。

本疾患は、細菌又はウイルスなどの病原微生物による嘔吐、下痢を主症状とする感染症です。原因はノロウイルスやロタウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルス感染による場合が主流ですが、腸管出血性大腸菌などの細菌が原因となる場合もあります。手洗いの励行とともに、体調管理に注意して感染防止に努め、早めに医療機関を受診しましょう。

【A群溶血性レンサ球菌咽頭炎】

第28週の報告数は88人で、前週より11人少なく定点当たりの報告数は2.84でした。地区別では、県南地区（19.33）が警報レベルの報告数となっています。

本疾患の好発年齢は5歳から15歳で、鼻汁、唾液中のA群溶血性レンサ球菌を含む飛沫などによってヒトからヒトへ感染します。また、食品を介しての経口感染もあります。潜伏期間は約1日から4日で、突然の発熱（高熱）、咽頭痛、全身倦怠感、時に皮疹もあります。症状がある場合は、早めに医療機関を受診するとともに、手洗いを励行し、感染防止に努めましょう。

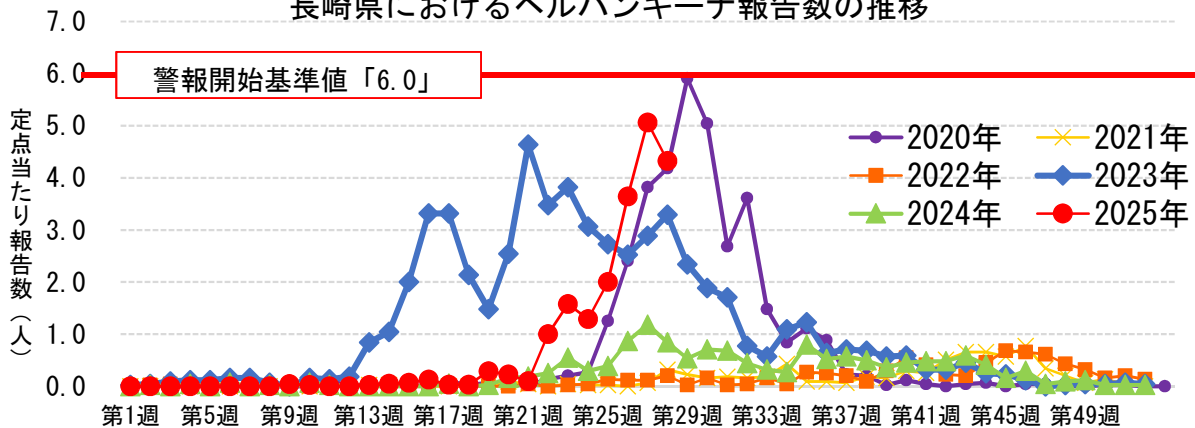
☆トピックス：ヘルパンギーナに注意しましょう

ヘルパンギーナは、4歳以下の乳幼児を中心に夏期に流行する小児の急性ウイルス咽頭炎です。感染から2～4日後に38度以上の突然の発熱に続いて、のどの痛みと口の中の水疱が現れます。ほとんどが2～3日以内に回復しますが、合併症として、脱水症や熱性けいれん、まれに髄膜炎や心筋炎を起こすことがあるので、注意が必要です。

主な原因はエンテロウイルスで、感染経路は、飛沫感染と患者の便に汚染されたオムツや下着、器物からの接触感染（糞口感染）です。便からは1週間から4週間にわたりウイルスが検出されるため、回復後も感染源となり得ます。保護者は乳幼児に手洗いを励行させて、感染防止に努め、体調管理に気をつけてあげましょう。

第28週の報告数は134人で、前週より23人少なく定点当たりの報告数は4.32でした。地区別では、10保健所中5保健所で警報レベルの報告数となっています。例年7月に報告が多くなりますので、今後の動向に注意し、予防に努めましょう。

長崎県におけるヘルパンギーナ報告数の推移



☆トピックス：海外渡航の際は、感染症に注意しましょう

夏期休暇を利用して海外へ渡航される方が増えることが予想されます。海外では、日本に常在しない感染症や日本よりも高い頻度で発生している感染症が報告されています。海外滞在中にこれらの感染症への感染を防止するためには、予防方法を知っておくことが重要です。厚生労働省のホームページには海外の感染症の発生状況や予防方法に関する情報が掲載されていますので、渡航先の情報を入手し、体調管理に努めましょう。

また、帰国後に症状が出た場合は、医療機関に相談・受診しましょう。その際には、旅行先や滞在期間、飲食状況、渡航先での職歴、家畜や動物との接触の有無などについて必ず申し出ましょう。

●厚生労働省ホームページ（海外へ渡航される皆様へ）

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou18/index_00003.html

●厚生労働省検疫所ホームページ（FORTH）

<https://www.forth.go.jp/index.html>

☆トピックス：伝染性紅斑の報告が多くなっています

伝染性紅斑は、ヒトパルボウイルスB19による感染症で、小児を中心にみられる流行性の発しん性の病気です。両頬がリンゴのように赤くなることから、「リンゴ病」と呼ばれることもあります。約10～20日の潜伏期間の後、微熱やかぜの症状などがみられ、その後、両頬に蝶の羽のような境界鮮明な赤い発しん（紅斑）が現れます。続いて、体や手・足に網目状やレース状の発しんが広がりますが、これらの発しんは1週間程度で消失し、ほとんどは合併症を起こすことなく自然に回復します。一方で、これまで伝染性紅斑に感染したことのない女性が妊娠中に感染した場合、胎児にも感染し、胎児水腫などの重篤な状態や、流産のリスクとなる可能性がありますので、注意が必要です。

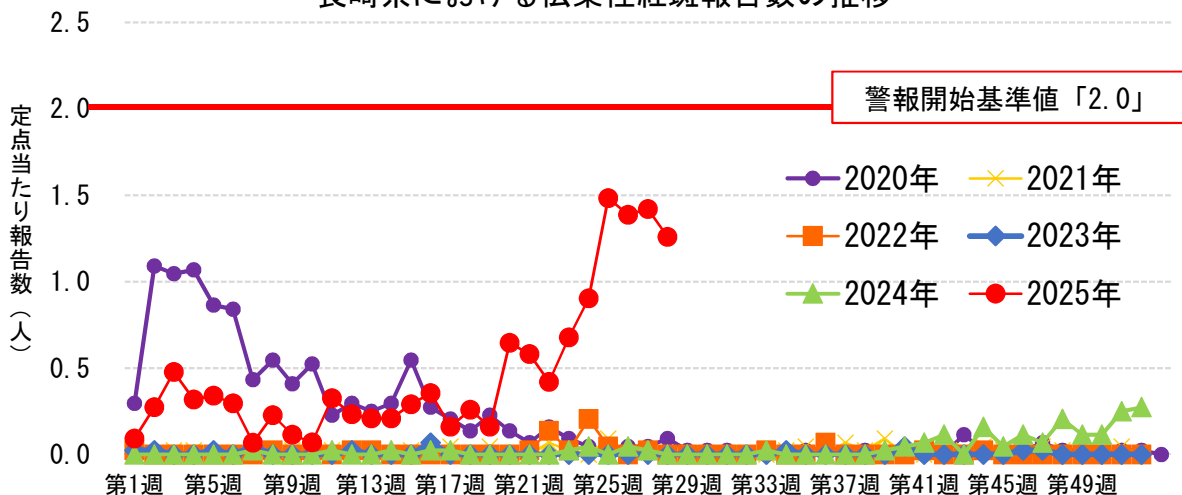
2025年第28週の定点当たり報告数は「1.26」で、過去5年と比較すると、報告が多い状況です。地区別にみても、長崎地区（3.33）、県央地区（2.40）は警報レベルの報告数となっています。

感染経路は、飛沫感染や接触感染で、かぜ症状のある時期にウイルスの排出が最も多くなるといわれています。治療薬やワクチンがないため、感染予防が重要です。特に妊娠中の方やそのご家族ではかぜ症状がある方との接触をできる限り避け、手洗いやマスクの適切な着用など感染予防に努めましょう。

（参考）厚生労働省 伝染性紅斑

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou19/fifth_disease.html

長崎県における伝染性紅斑報告数の推移



☆トピックス：百日咳の報告が多くなっています

百日咳は、主に百日咳菌の感染によっておこるけいれん性の咳発作を特徴とする気道感染症です。潜伏期は通常5～10日で、かぜ様症状で始まり、次第に咳の回数が増え程度も激しくなります。夜間の咳発作が多いことも特徴で、回復までに2～3か月かかることもあります。また、乳児では、肺炎、脳症を合併し、重症化することもあります。

2025年第28週には35件の報告があり、年代別では、10代（18人）および10歳未満（12人）が多くなっています。また、2025年第28週までの457件の報告においても、10代（232件、51%）、10歳未満（123件、27%）が多く全体の約8割を占めています。

感染経路は飛沫感染ですので、咳エチケット、手洗い、手指消毒で予防に努めましょう。

長崎県における百日咳の診断週別報告数

